

謝辞

今にして思えば、小学生時代からやっていた競技スキーのコーチがメンタルトレーニングの重要性を語っていたのが、心理学への興味の始まりだった。そのコーチは結構なプレイボーイで、普段馬鹿なことを言っっては子供たちを笑わせている様な人物であったが、私は彼に盲目的信頼を寄せていた。少年時代の私の盲目的性格が、私を筑波大学の心理学研究科へと目を向けさせるのにそう時間はかからなかった。中学3年のころには筑波大学を志していたと思う。その意味では、志通りの道筋を歩んできたとも言えるかもしれない。ただ一つ予定になかったのは、学部生時代に岩崎庸男、牧野順四郎両先生の個性的な授業に感銘を受け（他の教授が個性的でないということではない）、知らぬうちにこの研究室の門をたたいていたことぐらいか。

最近では、臨床心理学や社会心理学の誤った知識のみに基づいた興味から本大学の門をたたき生徒に辟易とする私であるが、振り返ってみれば、私こそ稚拙な興味のみで心理学という学問に身を投じた張本人ではないかと思う今日この頃である。

岩崎庸男先生はまず間違いなくお忘れになられていると思うが、生理心理学の授業で、私にプライミングとは何かということ質問なさったのが思い出される。生理心理学とは直接関係のない話題で的一幕であったと記憶しているが、私は広い教室の一番後ろに座っており、突然のことで急に覚醒水準の高なりを経験したのを覚えている（寝ていたわけではない）。Fig.1のスクワイヤーの記憶分類の構成概念の一つとしてプライミングを記述しているとき、そのことを思い出して少し懐かしくなったのでここに書かせていただいた。

私が線条体・海馬アセチルコリン系を研究するきっかけとなったのは、この研究室では極めて普通のことであるが、卒論の内容として「放射状迷路学習に及ぼす海馬・線条体アセチルコリン系損傷の効果」を提案していただいたことである。当時の指導教官である一谷幸男先生にとっては、間違いなく、扱いにくい学生だったであろうが、先生の辛抱強いご指導のおかげで、今こうして博論の謝辞を書いている私が在る。感謝の念のみである。ありがとうございました。

修士論文以降は、線条体、海馬アセチルコリン系がそれぞれ異なる機能を担い、さらに両系が相補的關係を構築しているという仮説を立て、研究してきた。予備実験や、学術論文から構築した仮説であったが、実験をしては細かい部分で仮説を立て直し、また仮説を立てては実験する、その繰り返しであった。私の研究は一見、明快な機能分離を示しているが、それ以外の部分では、各行動結果の解釈に非常に考えさせられた。詳細は論文にあるので割愛するが、岩崎庸男先生には、この考察において、非常に長い時間相談に乗っていただいた。失礼ながら、岩崎庸男先生には、物事を熟考する姿勢の暮さを教わった気がする。「そんなの研究者として当然のことなんだよ」とおっしゃられる

姿が目には浮かぶが、想像を絶する忙しさの中で日々過ごしている先生であるが、その貴重な時間を割いて、ある時などは日に何時間もディスカッションしていただいたことは、今も記憶に新しい。感謝の言葉しかない。本当にありがとうございました。

また、良きルームメイトとして、佐々木康成君には数え切れないほどディスカッションに時間を割いていただいた。自分の最も身近な所に、彼のような人物がいたことを幸運に思う次第である。考えてみれば、私は本来、ある意味感情型の人間であり、論理的なディスカッションをすることには少なからず抵抗を感じる人間であったような気がする。自然な形で、議論する姿勢を構築できたのは、彼の魅力によるところが大きい。

家族への謝辞も述べさせていたきたい。私には一つ年上の兄がいる。私の良き理解者でもある兄との会話の中で得たことは限りなく多い。私の研究活動を非常に肯定的に応援してくれたことは、何にも代え難い力を私に与えてくれたことを、ここに記しておく。母の常に変わらぬ無償の支援には、一生頭が上がらないだろう。いろいろと気苦労をかけたことと思う。母というのはつくづく偉大だと思う。最後になるが、父親について。父はある企業に勤めた後、自分の専門分野で、現在も勢力的に（本人はもう引退したいとぼやくときもあるが）活動している人物である。「大学卒業後は就職」という図式以外に慣れない父にとって、息子が大学院で何年も研究をすることは極めて非日常的な現実であったと思う。そういった状態の中で、その現実に対して肯定的姿勢を貫き通してくれた心情の中の葛藤は想像に余りある。感謝の意を捧げたい。

2000. 11. 24

小林 剛史